

天保十四年の キャリアオーバー

五十嵐貴久

第五回

第三幕 助六

一

1

宴うたげというより酔っ払いの馬鹿騒ぎだ、と團十郎だんじゅうろうはつぶやいた。
目の前では大名の江戸家老かろう、重臣じゅうしん、大身の旗本たいしん、御家人ごけにん、そして
富裕な商人たちが泥酔でいすいし、酔態すいたいをさらしていた。

團十郎も人並みに、いやそれ以上に酒を好む。度が過ぎるほど飲む
むこともあるし、それこそが酒の効用だと思っていた。

上野の花見のように、酔って騒ぐのが何よりも楽しいという場があるのは、その通りであろう。

だが、時と場合によるとも思っていたし、一番嫌いなのは他人の

銭で酒を飲むことだった。

この時代に限らず、歌舞伎役者には後援者、最良筋がいた。相撲の世界で言えば谷町だが、若い時から目をかけ、経済的に援助し、高価な舞台衣装や大道具小道具を買い与えることで、役者、あるいはその一座を応援する者たちである。

歌舞伎に関して言えば、発祥とも言うべき出雲の阿国以来の伝統であり、更に言えば分野を問わず芸術、芸能の世界では、そのような庇護者が必ず存在した。

秀れた芸を観たいというのは、人間の本然であろう。自分にはできない芸事であっても、その才能を見出し、その能力を育てるため衣食住を提供し、小遣い銭を与え、さまざまな場所へ連れていき、見聞を広める。

そうやって天から与えられた才能を育てることを悦びとする者は、洋の東西を問わず、枚挙に暇がない。ただ、團十郎自身はそういう者たちが嫌いだった。

成田屋という屋号が示すように、初代市川團十郎は千葉の成田山新勝寺の後援によって歌舞伎役者としての地位を固めていたし、今もその関係は深い。

だが、初代の頃とは違う。少なくとも、経済的な援助については不要になっていたし、團十郎自身、新勝寺との関係を必要以上に密

にしようとは考えていなかった。むしろ芸の妨げさまたになると思い、距離を取るようになっていたほどである。

同様に、鼻筋の客たちからの誘いもすべて断わることにしていた。馴なれ合いの関係になるのが嫌だったし、他人の銭での酒宴となれば、世辞せじや追従ついしようのひとつも言わなければならないと思うと、それだけで身震いするほど不快になってくるほどである。

飲む時はめえの銭で、好きなように飲む。そうでなければ何ひとつ楽しくない。

團十郎がいかに己おのれの才能を誇っていたかがわかるだろう。

團十郎にとって、社交は必要のないものだった。そんなことをしなくても、客は己の舞台を見に来るといふ自信があったのである。

狷けんかい介といえは狷介だし、増上慢ぞうじょうまんとも言えるが、天才特有の自負心ということかもしれない。

宴が終わり、南町奉行所みなみまちぎやうしよの外に出たところで、あの連中と一緒にしてほしくねえ、と唾つばを吐いた。

供きようされた酒も肴さかなも最高級のものだったし、舌が鳴るほど、ほつぺたが落ちるほど旨うまかった。

とはいえ、所詮しよせん宛あてがいものである。そんなものを飲み食いして喜ぶのは犬ころだけで、團十郎にしてみれば浅ましい限りだった。

(こりやあ、幕府も長くは保たねえな)

そんな想いが一瞬頭を過った。いやしくも幕府は政治の中樞であり、諸藩の重臣、旗本御家人にしても政に関わる身分である。

そういう立場にある者たちが、己の利と得だけを考えているようでは、政体として長く続くはずもない。

酔っ払った男たちが、奉行所の外で待っていた家臣たちに支えられるようにして、それぞれ駕籠に乗り込み、その場から離れていった。見回すと、二人の小坊主が立っていた。

戻りましょう、と團十郎は優しく声を掛けた。

「長居する場所ではありません。寛永寺に戻り、本日のお勤めをしなければなりません」

法良様は変わられましたね、と小坊主の一人が感に堪えたように言った。

「何と申していいのかわかりませぬが、何かを悟られたような……」
わたくしはまだ修行の身です、と團十郎はひとつ首を振って歩きました。背中の辺りに焼けつくような視線を感じていたが、あえて振り向かなかった。

鳥居耀蔵はお白州の隣にあつた小部屋の障子を閉じ、支度部屋に戻つた。

百本近い徳利が転がり、いくつかの膳部が引つ繰り返され、疊の上に杯や酒の肴が散乱している。見ているだけで不愉快だった。

癩性で、きれい好きな男である。特に、乱雑を嫌つた。

毎回のことで、やむを得ないとわかつていたが、腹立たしさの方が勝り、すぐ片付けよと低い声で命じた。若衆たちが慌てて畳を拭き始めた。

そのまま、続きの間に入った。蛭の仁吉をはじめ、五人の目明かしが平伏していた。

どうも妙だとつぶやいて、上座の座布団に腰を下ろした。何がでございましょう、と仁吉が目だけを上げた。

「特に変わったことはなかったと思いましたが」

あの坊主だ、と鳥居は細長い首を曲げた。

「奴が酒に弱いのはわかつている。だから飲まなかったのはいいが、膳部にほとんど箸さえつけなかったのはおかしい。前に本人が言っていたが、常日頃、精進料理しか食べぬ僧の身として、この時だけが極楽であると……形だけは食していたが、不審に思わなかったか」

さあ、と仁吉をはじめ数人の目明かしが顔を見合わせて首を振つた。所詮、その程度の者たちだと鳥居は苦笑を浮かべた。

期待していたわけではない。腹の中では五人の男たちを軽侮けいぶしていた。鳥居が何を言っているのか、意味さえわかっていないのだから。

よろしいでしょうか、と口を開いたのは鳶とびの五郎太ごろうただった。申せ、と鳥居はあばたの目立つ顔に目を向けた。

「鳥居様も前南町奉行、矢部定謙やべさだのりのことは覚えておられると思ひや
す」

無論である、と鳥居はうなずいた。忘れるはずもない。

南町奉行の職に就ついたのは、自分の讒言ざんげんにより矢部が失脚したためである。他藩預かりになった矢部は、抗議のため割腹かつぶく自殺を遂げていた。

「あの男は死んだ。もはや何もできぬ」

噂を聞いただけでやすが、と五郎太が膝を前ににじらせた。

「ちいっと聞き込んだところでは、矢部家の養子、鶴松つるまつが小石川こいしかわの貧乏長屋に住み着いているそうでやす。そこに何人か出入りしている者がいると聞きやした。まだそこまできわかっておりやせんが、どうも鶴松は鳥居様の陰富かげとみについて、何か探っているようですよ」

矢部鶴松、と鳥居はつぶやいた。姿勢のいい、いかにも武家の息子というべき、整った顔が脳裏に浮かんだ。

「おめえはそう言うが、矢部家は取り潰されてるんだぜ」仁吉が大口を開けて笑った。「お家は断絶、鶴松は浪人の身だ。そんな野郎に何ができると？」

待て、と鳥居は仁吉を手で制した。

「確かに鶴松は浪人身分だが、そう簡単ではない。矢部定謙は火付ひつけ盗賊改とうぞくあらためを振り出しに、境奉行さかい、大阪西町奉行かんじょう、勘定奉行こぶしんや小普請くみ組支配を経て、南町奉行にまで登り詰めた男だ。あのような最期を迎え、武士の身分はおろか、官位も取り上げられたが、幕閣ぼっかくに知己ちぎも多い。今、大目付おおめつけになっている遠山景元とやまかげもともその一人だ。鶴松が我らの陰富について訴えると、面倒なことになるやも知れぬ」

遠山景元は前北町奉行で、老中頭ろうじゆうかしらみずのただくに水野忠邦の改革に、当初より鳥居、矢部等と共に加わっていたことからわかるが、幕政刷新の必要性を強く感じていた者の一人であった。

ただし、町人への贅沢ぜいたく、奢侈しやし禁令を徹底しようとしていた水野、鳥居と意見が合わず、矢部と共に禁令の緩和を求めるなど、改革の方針を巡って水野と激しく対立していた。

ご政道の家康公の頃に戻し、町人や農民の権利を奪おうとする水野に対し、時勢に合った政治改革を唱える改革反対派きゆうせんぼうの急先鋒きゆうせんぼうとなつた遠山を、水野は罷免ひめんしようと考えていたが、その矢先に矢部定謙が南町奉行の座を追われたため、北と南の両町奉行を同時期に辞

めさせるわけにいかなくなった。最終的に鳥居の献策により、遠山を大目付にすることで決着をつけることにした。

大目付は奉行よりも上位職で、昇進であるから遠山も拒否できない。だが、形式的な職であり、実質的な権限がないため、実際には左遷させんであった。

水野と鳥居の狙いは、遠山も含めた改革反対派のいっそう一掃にあり、それに成功していた。

ただ、遠山自身に権限はなくなったが、鶴松が鳥居の陰富について証拠を揃えて訴えるようなことがあれば、取り調べを命じることのできるし、幕閣に知己も多い。面倒とは、そういう意味だった。

「鳥居様、それは考え過ぎというもの」仁吉が更に口を大きく開けた。「どう調べようとも、陰富が南町奉行所内で開かれていることは、誰にもわかりませぬし、証拠のひとつもありませぬ。何を聞かれても知らぬ存ぜぬで通せば——」

我らはそれでいい、と鳥居が口元を歪めた。

「奉行所で陰富に加わっているのは、ここにいる六人のみ。他の与力りき、同心どうしんも、怪しげな動きがあるのはわかっておるだろうが、見て見ぬふりをしている。その方が奴らにとって得だからな。難しいのは、今日集まっていた賭け手たちよ。あの者たちが口を割れば、すべてが終わる」

できるはずがありません、と猫屋ねこやの勝蔵かつぞうが首を振った。

「陰富はご禁制ぼくちの博打だと誰もがわかっております。それゆえ、加わっていたとなればお咎めとががあるのは必然。旗本御家人たちは改易かいえき、大名の重臣に至ってはお家取り潰し、藩そのものを失うことも十分にあります。奴らが口を割ることなど考えられませぬ」

それとも、と五郎太が畳を握った拳で軽く叩いた。

「何かある前に、矢部鶴松を殺しやすか」

しばらく黙っていた鳥居が、いかん、と首を強く振った。

「江戸の者なら、この鳥居耀蔵と矢部定謙の間に私怨しえんがあったことを誰もが知っている。鶴松が殺されたとなれば、世間が騒ぎだし、つまらぬ噂も流れるだろう。奴を殺すのは得策と言えぬ」

ではどうされるおつもりですと尋ねた仁吉に、捕縛ほばくせよと鳥居が囁いた。

「今すぐとは言わぬ。師走晦日しわすみせか、陰富の刻限にあの男が牢に入っていればそれでいい。いずれにせよ、陰富は今回で終わる。要は、あの男が動けぬようにすればそれでよいのだ」

「ですが、鶴松は古本を商っているだけで、捕縛しようにも……」
そんなことはどうにでもなる、と鳥居が立ち上がった。

「まずは奴が何をどこまで知っているのか、関わっている者が誰なのか、それを探るのが先であろう。鶴松は馬鹿ではない。頭のいい

面つらをしていた。何かに気づいていてもおかしくはない。我らの陰富の証拠まで揃あやえているというのなら、殺あやめることも考えねばならぬが、そうでなければ恐れるには足らぬ。捕縛とらするのが上策であろう」

人は誰でも叩けば埃ほこりが出る、と唇の端を歪ゆがめて鳥居わらが嗤わらった。

「万が一、何も出なくても、その時は埃をつけるのがお前たちの仕事。しかも、裁くのは南町奉行であるこの鳥居。必ず鶴松を牢に叩き込んでやる」

調べよ、と命じて鳥居は背を向けた。五人の目明かしが平伏したのが、気配でわかった。

3

上野黒門町うえのくろもんちやう通りまで戻ると、待っていた談志だんしが、これはこれはお坊様、とわざとらしく大声を張り上げた。

「いや、驚きましたな。これぞ奇縁と申しませうか。昼に会い、夕に会い、前世の宿縁でもあるのでございませうか」

あの、と小坊主が足を指さした。

「いやいや、これぞまさに靈験れいげんでございませう」これこの通り、と談志が足を踏ん張った。「何もかもがお坊様のおかげでございませう。わたくしも寛永寺の檀家だんかとなつて早四十年、いろんなことがござい

ましたな。あんなことがあった、こんなことがあった、そんな思いで胸が一杯でございます。そう言えばお嬢様のことでございますが、これもまたお坊様の功德くどくということなのか、あれから一刻も経たぬうちに、ぴたりと癩しやくが収まりましたな。いかがでしょう、せめて顔だけでもご覧になってはいただけませぬか。あの時のお坊様にお礼を言いたいと、お嬢様も申されておりました」

さすがは咄家はなしかというべきか、立て板に水のような勢いで喋りしゃべり続けている。お嬢様はあちらのお宅で休まれております、と談志が近くの家を指さした。

「こちらのお二人には、わたくしがお礼致しましょう。よく行く茶店があるのですが、その羽二重はぶたえ団子が名物でして……」

茶店で待つように二人の小坊主に命じ、お葉はながいるという家へ向かうと、横合いから腕を掴つかまれ、路地に引き込まれた。そこにいたのは鶴松だった。

「ずいぶん、長かったですね」

袴かみしもまでつけている鶴松の姿を見て、似合うじゃねえかと皮肉を言った團十郎に、止めてくださいと頬を膨ふくらませた。いい大人なのに、子供っぽい表情を作る男である。

「わたしも鳥居の陰富の寄り合いに出たことになっていましたから、法良のそばで見張っているわけにもいきません。引き留めたのはお

葉さんです。痛い、苦しい、助けてください、迫真の芝居でしたよ」
「おめえは蔭からそれを見てたってわけだ。妬けたんじゃねえのか」
そんなことより、寄り合いで決まったことを教えてください、と
鶴松が顔を寄せた。

「いくらお葉さんでも、これ以上引き留めるわけにはいきません。
法良も寺に戻らなければなりませんからね。もつとも、本人はお葉
さんの手を握って、片時もそばを離れませんでした」

「確かに、お葉さんは美人だからな。女つ気のねえ坊主の魂を抜く
なんて、朝飯前だろう」

勝ち気だからおれには合わねえがとつぶやいて、團十郎は懐に
手を差し入れた。出てきたのは細長く切り取った障子紙である。

その場では何も書いてはならないと命じられていたが、鳥居の話
がひと通り済んだところで廁かわやへ行き、一気呵成いっきかせいに説明された内容を
書き連ねておいたのである。

「字が汚くてすまねえ。何しろ立って書かなきゃならなかったから、
なかなか難しくてな」

十分読めます、と障子紙を指でたどりながら鶴松がうなずいた。
「なるほど、わたしの読みもそれほど外れていなかったようです。
やはり鳥居は総返しの話をしましたか」

念入りにな、と團十郎は青光りしている頭に手をやった。陽ひが落

ち始めていたせい、やたらと頭が冷えた。

「そうでなけりや、賭け手の連中が納得しねえだろう。鳥居の話が終わった後、飲めや謡えのどんちゃん騒ぎが始まったんだが、聞いていて背中が逆立ったよ。奴らはそれぞれこの十年で、数十万両の損金を出している。今回の湯島千両陰富で留札を当てりやあ、取り置いている百万両はもちろん、褒美金も入ってくる。当てるためには、陰富札を買いまくるしかねえ。奴らも切羽詰まってるんだ。最低でも十両は注ぎ込む勢いだったぜ」

ここにいてください、と鶴松が丸めた障子紙を懐に押し込んだ。「わたしは陰富の会合について、法良と話をしなければなりません。談志師匠が行った茶店はわかっています。わたしと法良がこの家を出たら、七代目は中で隠れていてください。いいですね」

酒ぐらいあるんだろうと言った團十郎に返事もせず、鶴松が勝手口から家の中へ入っていった。

疲れるぜ、と團十郎は空を見上げた。宵の明星が美しく輝いていた。

四

その晩、團十郎は勧められるまま酒を飲み、潰れるようにして眠

った。敵陣に乗り込んでいた、という緊張感が解けたせいもあった。
何しろ、江戸四方十里所しほうじゅうりところばらの身である。更に、僧侶に化けて鳥居の本拠地である南町奉行所に入り込み、自分を捕縛した鳥居耀蔵と顔を突き合わせていたのだから、いつ露見ろけんするのかと内心冷や汗ものだった。

奉行所の門を出た時に気づいたが、両脇に汗の染みができていた。舞台の上でも、ここまで緊張したことはない。酔いの回りが早かったのは、そのためもあった。

僧衣を着流しに替え、黒門町を出たのは辰の下刻たつげこく（午前九時）である。半刻もかけずに、小石川の蝸牛長屋かたつむりながやに着いた。土間で待っていたのはお葉と談志の二人である。

ご苦労だったね七代目、と談志が声をかけた。

「いやあ、今だから言うけど、おいらはてつきり鳥居の野郎が七代目だと見破るんじゃないかねえかと思ってたんだよ」

お葉が差し出した手のひらに、談志が一分金いちぶきんを載せた。

「賭けには負けちまったが、まあいいさ。無事に帰ってきたんだから、それで良しとしなきゃな」

上がりなよ、とお葉が顎あごをしゃくった。狭い部屋に鶴松が座っていた。
いた。

「あれから、どうした」

向かいに腰を下ろすと、法良に一から十まですべて伝えました、と鶴松がうなずいた。

「七代目のおかげです。改めて礼を言いますが、子細しさいに会合の内容を記してもらい、本当に助かりました。法良も寛永寺の住職にうまく話せると言っていましたよ」

物覚えはいい方でな、と團十郎は鼻の頭を搔かいた。秀れた役者なら、そうでなければならぬだろう。

台詞覚えせりふはもちろんだが、時には台本に変更が入ることもある。初日前日の舞台稽古で筋が変わったり、それを演じることも日常茶飯事だ。

「鳥居の狙いもだいたいはわかっていたからな。別に礼を言われるようなことじゃねえ」

入ってきた談志が鶴松の隣に腰を据え、続いたお葉が盆の湯呑みを畳に直接置いた。

「師走だな」

番茶の温もりが手に優しくかった。師走です、と鶴松がひと口茶を啜すすった。

「いよいよ今月晦日、湯島天満宮ゆしまてんまんぐうで千両富興行が開かれます。つまり、鳥居の千両陰富も同日に行われるということですよ」

そういうことだ、と團十郎は湯呑みを畳に置いた。

「だがな、昨日鳥居の話聞いていて、おれにはよくわかったよ。いや、今までだってわかっちゃいたが、あえて気に留めねえようにしていた。だけどな、鳥居本人の口から細けえことを聞いちまうと、そういうわけにもいかねえ。思うんだが、どうやったって留札を当てることなんかできやしねえ。そうじゃねえか？」

どうしてそう思うのさ、とっつけんどんに言ったお葉に、湯島天満宮の富籤とみくじ興行で売りに出される富札の数を知ってるか、と團十郎は右手を大きく開き、更に左手の人差し指を添えた。

「六万枚だぞ？ 留札はその中の一枚しかねえ。そんなもの、神様仏様だって当てられやしねえよ。当たり前の話じゃねえか。それとも何か、鶴松には鬼神きしんの力でも備わってるというのか？」

話してなかったのかい、と談志が湯呑みを抱え込むようにした。今日話すつもりでした、と鶴松がうなずいた。

「七代目が言った通り、六万枚のうち一枚の留札を当てることできる者はいません。そもそも富籤とは当てるものではありません。、、、当たるものを神仏が決める神事なのです」

富籤において、富札を買う者の意志は反映されない。金を支払い、富札を渡されるだけである。

すべて神仏頼み、運任せ、というのが富籤の本質だった。

「わたしたちの運が弱いのは、お互いの顔を見ればわかるでしょう」

鶴松が苦笑を浮かべた。「運が良ければ、もつと違う生き方があったはずです。少なくとも、こんな貧乏長屋でもたれ合うようにして生きていくということはなかったでしょうね」

貧乏長屋で悪かったなどこぼした談志に、住めば極楽ですと鶴松が笑った。

「正直なところ、もし留札が当たって、千両が手に入ったとしても、わたしはここから出るつもりはありません。この暮らしが気に入っています。武家屋敷で暮らしていた頃を思えば、こんなに気楽に過ごせることが夢のようです……とはいえ、世間はわたしたちを不運な負け犬だと思うでしょうし、それは認めざるを得ません。わたしたちの持っている良運をすべて合わせても、留札を当てることは絶対にできません」

だからこそ、おめえは策を立てたと團十郎は言った。

「湯島天満宮と八丁堀の南町奉行所が離れていることを利用して、湯島からやってくるおはなし屋……今回は鳥居配下の目明かし連中だが、そいつらを足止めし、偽の番号を伝え、当たり籤を作るっていうのは、悪い策じゃねえ。昨日、おれはおはなし屋役を務める五人の目明かしの面を見た。どいつもこいつも憎体にくていだな。一目見たら忘れねえ。悪相揃いだから、覚えやすいだろう」

蛭の仁吉、霞の幸助、鳶の五郎太、猫屋の勝蔵とその弟の時蔵、

と鶴松が丸めていた障子紙をするすると伸ばした。

ひるじん
蛭仁は知ってるよ、と談志が口元を歪めた。

「面もひでえが、心はもつとひん曲がつてる野郎だ。元は甲州のやくざ者だったらしいが、無宿人として江戸に流れ着き、いつの間にか目明かしになってやがった。弱い者いじめをさせたら天下一だよ。野郎にたかられて潰れた店が何軒あるか、数え切れねえぐらいだ」

他の四人もすぐわかる、と團十郎は湯呑みを突き出した。

「目明かしは同心の抱えている子分のような連中だが、一応市中見回りをしているから、夕刻には奉行所に戻らなきゃならねえ。一度は奉行所に顔を出し、名前もわかってるんだから、家を見張ったっていい。その方が確かかもしれねえな。その辺りはどうにでもなるが、そこからどうするつもりなんだ？」

おつちよ
仏頂面のお葉が茶を注ぎ足した。どうするとは、と鶴松が尋ねた。

「おめえは鳥居から百万両の大金を騙し取ろうとしている張本人だが、他に手を貸している者がいるのもわかっている」早い話、昨日黒門町にいた連中がそうだと團十郎は言った。「ただな、湯島天満宮の千両富はすげえ人出だぞ。境内はおろか、周りの道も人で埋め尽くされるほどだ。その中で、あの五人を見つけれられるのか？」

七代目が考えているより味方は多いんです、と鶴松が微笑んだ。

「鳥居、そして前老中水野忠邦を恨んでいる者は少なくありません。職を失った者も大勢います。十人、二十人で目明かしを取り囲めば、見失うことはないでしょう」

何だか頼りねえな、と團十郎は注がれた茶を一気に飲んだ。

「大丈夫なのか？ だいたい、どうやって目明かしどもを足止めする？ 師匠の話じゃ、蛭仁ってのは元やくざ者だというし、他の連中も似たようなもんだろう。先祖代々素性すじょうの確かな目明かしなんて、聞いたことがねえよ。奴らは法良とは違うぜ。女が道に倒れてるからって、同情なんかしねえ。目もくれず奉行所に走っていくだろう。そんな奴らをどうやって止めるっていうんだ？」

手はいくらでもあります、と鶴松が言った。

「一番いいのは湯島天満宮から出さないことですし、そのための手も打っています。もし外に出たとしても、七代目が言った通り道は人で溢れていますからね。湯島に釘付けにする必要はありません。とにかく、南町奉行所に近づけないようにすればいいだけのことですよ」

だが、それはこっちのおはなし屋だってそうだろう、と團十郎は鶴松の目を見据えた。

「晦日の湯島じゃ、普通に歩いてたつて小半刻こはんとき（一時間）で一町（約一一〇メートル）も進めねえって話もあるぐらいだ。それは大袈裟

だとしても——」

案外七代目はここが弱いね、と談志がこめかみの辺りを指で叩いた。

「こつちのおはなし屋は、湯島にいたっていいんだよ。この長屋にいりゃあいいし、何だったら八丁堀に最初からいたっていい。それじゃ近すぎるっていうんなら、神田明神辺りから走らせればいいんだ。どうせ偽の番号を伝えるんだぜ？ 湯島千両富で何番の籠が突かれたかなんて、どうだっっていんだよ」

こいつは一本取られた、と團十郎は頭をこすった。

「だがな、おれのこともちったあ考えてくれよ。法良になりすまして、奉行所に行くのはおれなんだ。言ってみりゃあ、敵の本陣だぞ。与力だって同心だって目明かしだって、何十人、何百人といるだろう。つまり、鳥居を守る者は腐るほどいるってことだ」

「まあ、そうだね」

「それなのに、おれは一人だけで、刀の一本も持っていねえ。坊主が刀を持ってたらおかしいだろう。持っていたとしたって、おれに剣術の心得はねえよ。もし正体が見破られたら、どうなるかわかってるのか？ 膾切りに切り刻まれるか、簀巻すまきにして桜川にほうり込まれるか、どっちかだよ。ついでに言っておくが、おれは泳げねえからな」

何を自慢してるんだか、とお葉が横を向いて笑った。笑い事じゃねえぞ、と團十郎は立ち上がった。

「いいか、奉行所にはおれ以外誰も入れねえ。用心棒に宮本武蔵を雇ったって、門前払いだよ。鳥居がどうかじゃねえ、奉行所にしてみりや当たり前のことだ。誰でも彼でも入れるわけにはいかねえんだよ。そうだろ？　つまり、命を張るのはおれだけで、お前らは高みの見物ってわけだ。うまくいってもいなくても、お前らの生き死には関係ねえが、おれは間違いなく殺される。万全の策がないけりや、こんな馬鹿な話には乗れねえよ」

座ってください、と鶴松が畳を指した。

「言いたいことはわかります。ですが、万全の策など、この世にはありません。何についてもです。どれだけ考えに考え抜き、策を練り上げたとしても、すべてがその通りに運ぶとは誰にも言えません。何があるかわからないのは、人の世の常。違いますか」

坊主みてえなことを言いやがる、と乱暴に團十郎は腰を下ろした。すべてに万全を期しますが、絶対の策などないと言っているのです、と鶴松が尖った鼻梁とがに触れた。

「ただ、わたしも酔狂すいきょうでこんなことを考えたのではありません。覚悟があります」

「覚悟？」

万が一、七代目にもしものことがあれば、と鶴松が脇差わきざしを傍かたわらに置いた。

「その場で腹を切ります。それがわたしの覚悟です。あなたは一人で敵の本陣に乗り込むというが、それは違います。わたしは常にあなたと一緒にいる。それを忘れないでください」

おれのために腹を切るわけじゃねえだろう、と團十郎は大きな鼻をこすった。

「お葉さんと師匠のためか？ 二人を守るために、てめえが死んで幕を引こうってわけだ。手を貸してくれる連中のためでもあるんだろう」

すべての責めはわたしが負います、と涼やかな声で鶴松が言った。

「お葉さんも師匠も、わたしにそそのかされただけのこと。鳥居以外、誰のことも傷つけたくありません。ですが、七代目の命が懸かっているのはその通りです。そして、わたしにはあなたの命を守ることができません。できるのは、あなたを一人にしないと約することだけです」

腹の立つ野郎だ、と團十郎は胡座あぐらをかいた。

「何が腹が立って、お前が本気で言っているところだ。おれが殺されたとわかったら、その場で迷わず腹を切るだろう。目を見りゃあ、それぐらいわかる。だが、どうしてだ？ おれとお前はつい半

月前まで、口を利いたこともなかったんだぞ？ そんなおれのために腹を切るっていうのは、どういう「見だ？」りょうけん

友と信じているからです、と鶴松が微笑んだ。

「死生、命あり。人の生死は天命によるもので、人の力ではどうにもならないと言われますが、そんなことはありません。『史記』には、士は己を知る者の為に死すとあります。わたしはあなたをよく知っているつもりです」

今までその目で何人の男を騙してきやがったんだか、と團十郎はつぶやいた。

「泣かせた女も多かっただろうな……おれは運が良い役者だったぜ。お前みたいな野郎が舞台上に上がったら、こっちはおまんまの食いっぱぐれだよ。わかったわかった、煮るなり焼くなり好きにしろ。おれの命はお前に預けた」

無言で鶴松が頭を下げた。こんな変わった野郎は見たことがねえ、と半ば呆あきれながら團十郎は懐から取り出した煙管きせるをくわえた。

五

その日の仕事を終えて、鳥居は支度部屋に下がった。多くの同心が目礼する。彼らの主な仕事は、取り調べにおける書類の作成であ

った。

励めよ、とひと言だけ言って、そのまま続きの間であるもうひとつの支度部屋に入った。そこに蛭の仁吉をはじめ、五人の男たちが控えていた。

鳥居の陰富に、与力や同心たちは関与していない。南町奉行所には二十五騎の与力が配置されていたが、その身分は歴れつきとした御家人である。二十五騎というのも、馬上の身分を示すため、そう呼ばれていた。

罪人を扱うことが前提の職であるため、御家人身分とされたが、実質的には旗本並の待遇であり、鳥居としても彼らを陰富に引き入れることはできなかった。

それは同心も同じである。南町奉行所には百人の同心が置かれていたが、彼らもまた基本的に徳川家直参じきさんの足軽身分出身の者たちだった。

他にも忍者を祖とする伊賀同心、甲州口の警備を担当する八王子千人同心など、同心にはいくつもの組織がある。

足軽身分ではあるが、江戸時代初期から同心になった者も多く、特に奉行所ではそうだった。このような者は「譜代同心ふだいどうしん」と呼ばれ、一代足軽ではなく、子孫に身分を受け継がせることもできた。

同心もその身分は御家人であり、武士組織に属しているため、鳥

居としては信用できなかつた。金よりも忠義心の方が勝る者が少ないためである。

その点、目明かしは違つた。目明かしとは主に関八州かんはつしゅうでの呼び方であり、江戸と大坂では岡おかつ引びき、御用聞ごようきき、手先てさきなどとも呼ばれていたが、鳥居は目明かしと呼ぶのが常だつた。

目明かしは奉行所が雇つてゐるのではなく、同心がいくばくかの小遣い銭を与えて江戸の治安維持に協力させていた者たちを指し、その任務のほとんどが犯罪捜査であつた。言つてみれば私設警察官である。

その下には更に下つ引きと呼ばれる者たちがおり、合わせて約三千人ほどだつたというが、正確な数は現在も不明なままである。

その目明かしたちの中から鳥居が選んだのが、この五人だつた。揃つて悪相なのは道理で、陰富は法に反した賭博行為である。

不正に手を染める者は悪人であり、どうしても面構えが悪くなる。それゆえ、五人は悪相なのである。

もともと目明かし身分の者は、やくざ、無宿人の出が多い。五人とも一度は捕縛されたことがあり、それを契機に目明かしに転じていたという事情があつた。

前科者であるため、裏の世界に詳しいことから、犯罪者仲間にも顔が利く。

それを見込んで同心たちが手なづけ、使うようになっていたが、もともと悪人であり、悪人の心根がそう簡単に変わるものではないと鳥居は知っていた。

調べに調べ抜き、この五人を選んだ。決め手となったのは、自分と同じ臭いを嗅いだためである。

金に執着する者は金に転び、金に忠誠を誓う。そして金を裏切ることはない。十分な報酬さえ与えれば、忠実な飼犬になるとわかっていた。

今回の湯島千両陰富が最後だ、と鳥居は五人の男たちに目を向けた。

* * *

天保九年（一八三八）、目付に昇進した頃から、鳥居は老中頭水野忠邦の懐刀として幕政改革に取り組んできた。

幕府の儒官、林家の出である鳥居にとって、幕府の権威を守ることにこそが重要であり、そのためには徳川家康の頃に時代を戻さなければならぬ、という信念があった。徳川家、幕府、武士階級を中心とする封建体制である。

水野も同様の意見を持っていると知り、賄賂を使うなどさまざま

な手段を用いて近づき、拔擢はくつぱくに次ぐ拔擢を受け、現在の町奉行の地位を得た。

だが、その後幕府内部の体制を詳しく知るに及び、いずれ幕藩体制が終焉しゆうげんを迎えることを知った。どのような形であれ、幕府は瓦解がかいするであろう。

それは天保十四年（一八四三）、勘定奉行と勝手方を兼任したことによって、確信に変わった。

先がない幕府と心中する気など、鳥居には毛頭もうとうない。幕府に忠義を尽くすより、優先されるべきなのは自らの利であり、要するに金だった。

生来の性格として、鳥居は金銭欲が異常に強かった。金に対する執着心は、自分でも理由がわからないほどである。

血筋で言えば、朱子学者であった林家の血を継ぐ者として、金銭には恬淡てんたんとする家風だったが、自分でも持て余すほどの金銭への渴望があった。

贅沢じよしやくということでもない。女色おほに溺れるわけでもなく、何が欲しいというでもない。

ただ、金を見ていたのである。触れていたいのである。金に埋もれていた、それだけである。

金は鳥居にとって性的快感より強烈な悦楽えつらくであり、異常な興奮を

もたらずものであった。

形式にこだわった改革を推し進めようとした水野を見限り、裏切ることで新しく老中頭になった土井利位といたつちにいたが、土井は水野より更に無能で、鳥居にとって扱いやすい男だった。

町奉行の職に就いてすぐ、十年以上前から場所を変えて開いていた陰富の賭場とばを、南町奉行所内で行なうことにした。天保年間には富籤が何回目かの大流行となっていたので、開帳の回数を増やしたが、土井はそれにも気づかなかった。

幕府の財政は破綻はたん寸前どころか、実質的には破産状態にあった。そして、幕府に財政を立て直すことのできる人材はいない。

できることといえば、贅沢や奢汰をこれまで以上に厳しく取り締まり、出費を押さえることだけである。

社寺による富籤興行の中止は、老中たちでも老中頭の土井でもなく、第十二代將軍徳川家慶いえよしの決断によるものであった。

それだけの危機感が將軍家にはあるのだろう。將軍自らが富籤のような些事さじに口を出すことなど、過去に例はない。

何を今さらと鳥居は思っていたが、外ならぬ將軍の直命である。従わざるを得ない。来年、天保十五年一月一日より、全国の社寺における富籤興行の中止は決定事項だった。

陰富は富籤興行がなければ成立しない。従って、今後陰富の開帳

はできなくなる。

そうである以上、過去約十年にわたって取り置いてきた百万両を我が物にしようと鳥居が考えるのは、当然の結論であった。

そもそも取り置き金制度自体、賭け手である大名小名の有力家臣、あるいは大旗本、御家人、更には富裕な町人、僧侶を引き留めておくための便法だった。

胴元どうもととして賭け金を管理し、当たり籤が出れば支払いをしてきたが、何万両、あるいは何十万両もの損金を出している者が不満を持たないはずがない。

毎回の陰富において、外れた賭け金を取り置いておき、湯島千両富のような大きな富籤興行で留札の当たり籤が出た場合、全額を払い戻すと定めたことよって、彼らの射幸心しゃこうしんを煽った。

更には、最後まで留札が当たらなかった場合、それぞれが賭けに投じてきた金額の多寡たかによって取り置き金を分配すると保証していたからこそ、ここまで長く続けることができたのである。

取り置き金の総和は、積もり積もって百万両となっていた。そして、次の湯島千両富が最後の陰富の場となる。賭け手たちは今まで以上に巨額の賭け金を注ぎ込むだろう。

すべて総取りにする、というのが鳥居の計画だった。今までもそうであったように、何もかもが描いた絵図通りに動いている。

試算を繰り返したが、湯島千両陰富の賭け金を加えると、二百万両近い大金が鳥居の物になるはずだった。考えただけで脳天を快感が貫き、胴が震えた。

*

*

*

「始めよ」

低い声で命じると、五人の男たちが畳を外した。床下に木箱があり、その中に大量の和紙が入っていた。

その半分ほどに、墨で文字と数字が記されている。陰富札であった。

一般に売られている富札もまったく同じで、紙に文字や数字による番号が記されているが、陰富札との違いは、その一枚一枚に寺社の朱印が押してあることだった。偽造防止のためだが、陰富札の場合、その必要はない。

陰富においては、客の側が番号を指定して、陰富札を購入する。その際、胴元の側も番号を記録しておくのが定法だったし、特に鳥居の陰富のように客の顔触れが決まっている場合、確認の必要さえなかった。

「鳥居様、陰富札も六万枚となりますと、なかなか大変でございますま

すなあ」

蛭の仁吉が愛想笑いを浮かべた。たった五人で六万枚の番号違いの陰富札を作っていくのである。しかも、同じ番号を書いたり、抜けがあつてはならなかった。

陰富札の作成に関しては、胴元がすべての責任を取らなければならぬ。あり得ないことだが、同じ番号を買った者が留札を当てたら、どれほど面倒な悶着もんぢやくが起きるかわからなかった。そのためにも、注意を怠るわけにはいかなかった。

嚴重に確かめよと命じた鳥居に、なぜ今回に限って二通り作らねばならないのでしょうか、と猫屋の時蔵が顔を上げた。鼻が欠けているのは、梅毒のためである。

「六万枚でございますよ。まだ二万枚も終わっておりませぬ。すべての番号を書かねば、確かめることなどできません。それをもうひとつ作れというのは、どのようなわけがあるのでございましょうか」
下知げじに従え、とだけ鳥居は言った。頭は自分であり、目明かしたちは手足に過ぎない。手足は頭の命に服していればそれでいい。

「ここには誰も入って来ぬ。そのように命じてある。十日で終わらせるように」

それだけ言つて、支度部屋を出た。奉行の私邸は奉行所の敷地内にある。

そのまま庭に出て、鳥居は奥へ向かった。

六

わからねえことがひとつある、と團十郎は左右に目を向けた。

「昨日、おれはこの耳で鳥居の話をはっきり聞いた。あんな嫌な声は聞いたことがねえ。なるほど、妖怪と呼ばれるのももつともだと思っただぜ」

余計なことはいいから、とお葉が睨みつけた。

「あたしも師匠も、あなたの書き付けは読んで。思ってたより頭がいいみたいだね。簡潔で要領よくまとまっていて、わかりやすかったよ」

そいつは過分なお誉めの言葉、と團十郎は苦笑を浮かべた。

「奴の話じゃ、取り置き金の総額は百万と飛んで二千両、そういうことだった。もう二千両なんぞ端金はしがねだから、そいつはいいとして、百万両だぞ？ 奴の話を知っている限り、満更まんざら嘘ってわけでもなさそうさ。奴が奉行所の床下かどこかに、百万両の金を隠し持っているのは間違いねえ」

「だから？」

鳥居の噂はいろんなところから耳に入ってくる、と團十郎は右の

小指を耳の穴にねじ込んだ。

「噂というより、はっきり言えば悪口だな。人としての心がない、冷酷非道、中には人殺しとまで言う者もいた。だが、誰もが悪し様に罵るのは、奴の銭に対する汚さだ」

わたしたちが思うほど、鳥居は恵まれた暮らしを送ってきたわけではありません、と鶴松が腕を組んだ。

「鳥居は幕府お抱えの儒者で、大学頭を務めている林述齋はやしじゆっさいの三男です。当然ながら、家を継ぐわけにはいきません。幸い、旗本の鳥居成純なりすみの養子となったことで、武士としての身分を得ましたが、鳥居家は二千五百石取りとはいえ、内情は火の車のようです」

武士は食わねど高楊枝たかようじつて言うだろ、と談志がうなずいた。

「二千五百石取りの旗本と言やあ、それなりの家格だ。容儀も整えなきやならねえ。軍役やら立弓、鉄砲、槍やり持ち、甲冑かちゆう持ち、他にも草履取りや馬の口取り、足輕から小荷駄こにだ持ち、三、四十人を雇い続けなきやならねえ。馬だつて二頭はいるだろう。表だけじゃねえ、裏もある。女中の七、八人も揃えなきや格好がつかんよ。二千五百石取りつてのは、中途半端でいけねえ。普通、三千石取りからが自身の旗本つてことになるが、五百石も実入りが少ねえのに、同じだけの人数を雇い、給金を支払うつてことになると、台所は苦しかつただろうな。金にしわくなるのも、無理はねえ」

町人からは殿様と呼ばれても、暮らしはその町人以下ってわけだ、と團十郎はうなずいた。

「そこから抜け出すためには、出世するしかねえ。簡単に言えば、奉行職に就くことだが、そのためには上に賄賂を渡さなきゃならねえ。だから金がいるってことになる。鳥居が無能だったら、そんなことは考えなかつただろう。屋敷で傘でも貼ってたんじゃねえか？だが、あいにく奴は誰よりも賢く、有能な切れ者だ。陰富に目を付け、その利で次々に地位を築いていった。利は利を呼び、今じゃ天下の町奉行様だ。その代わり、奴は魂をなくしちゃったがな」

妖怪だからね、とお葉がぼつりとつぶやいた。金は金を欲します、と鶴松がため息をついた。

「欲に限りはありません。何のために金を欲しているのか、今では鳥居もわからなくなっているでしょう。それが金の魔力です。お足とはよく言ったもので、なければ身動きが取れませんが、あり過ぎても足並みが揃いません」

鳥居は金に取り憑かれた亡者だよ、と團十郎は鶴松の顔を正面から見据えた。

「餓鬼がきといつてもいいが、一両、一朱、一分の銭だって、誰にも渡したくねえだろう。ましてや百万両だ。お前も言っていたが、てめえで総取りする腹積もりなのは間違いないねえ。だが、どうすりゃそん

なことができる？」

手はあるでしょうと鶴松が言ったが、考えられねえと團十郎は首を振った。

「奴は昨日、賭け手の前ではつきり言ったんだぞ。湯島千両陰富の留札を当てた者に、褒美金と取り置いている百万両をそっくりそのまま差し上げますってな。そして、誰も留札を当てることができなかった時は、今まで支払っていた賭け金の額に応じて百万両をそれぞれに分配すると……そう言わざるを得なかったのはわかる。そういう取り決めでなけりや、誰かがどこかで手を引いただろうからな」

陰富を開帳するにあたり、鳥居は最も苦労したのはそこだったはずだ、と團十郎は思っていた。

博奕はすべて同じだが、勝つのは胴元だけで、客は負けるものと相場が決まっている。團十郎自身、何度も痛い目にあってきたから、そこは誰よりもよくわかっていた。

しかも、陰富は幕府が厳禁している博奕だ。直参じきさんの旗本である鳥居が陰富の場を立てているとわかれば、単純に改易や家名断絶では済まない。切腹どころか打ち首になってもおかしくなかった。

口の堅い面子を集めなければならなかっただろうし、時には勝たせなければならぬ。負けてばかりの鉄火場に通う者など、いるは

でもないからである。

相応の供応もしなければならぬし、負けたとしても楽しかったと思わせ、次は必ず勝てると思込込ませる必要もある。

人の心を操るのは鳥居の十八番だが、それにしても決して簡単ではなかったはずだ。負けが込んだ者を救済し、時には他の面での便宜を図ったこともあっただろう。

取り置き金という制度を作り、留札が当たった時は総返しと取り決めたのは、そのためもあったはずだ。

だが、富籤の留札など、めったなことでは当たらない。陰富の場が立ったたびに、取り置き金は増えていった。

いつからかはわからないが、賭け手たちも欲に目が眩むようになった。どれだけ損金が出たとしても、留札が一回当れば莫大な取り置き金が入ってくるのだ。射幸心を煽るという意味で、これ以上の策はなかっただろう。

だが、それだけでは、留札など当るはずがないということにいずれ賭け手たちも気づく。その瞬間、全員が波が引くように鳥居の陰富から去っていくだろう。

陰富の場がなくなるだけならいいが、賭け金を回収できなかった者が、悔し紛れに鳥居の陰富について密告するかもしれない。そうなったら、鳥居は破滅する。

それを防ぐためにも、最終的に取り置き金を分配するという取り決めを作るしかなかった。昨日も鳥居はそれを強調していたが、だからこそ賭け手たちは安心して陰富に興じることができたのだ。

金を得るために始めた陰富だったが、今では陰富が鳥居を支配していた。

利のためには客を引き留めなければならない。そのために、さまざまな手段を講じ、最終的には取り置き金の分配という取り決めまでしなければならなかった。

だが、鳥居は一分たりとも誰の手にも渡さないと決めている。妄執であり、矛盾しているが、それが鳥居の偽らざる心境だろう。

金のことだけなら、打つ手もあるさと談志が言った。

「乱暴なことを言っちゃまえば、百万両を抱えて逐電ちくでんしちゃまえばいい。晦日までまだ日はあるんだ。鳥居が使っている目明かしたちに命じて、山の中にも隠してから逃げ出すことだってできる。医者巻き込んで、死んだことにしてもいい。それが駄目でも、南町奉行所に火をつけるって手がある。小判が全部溶けちまったとすりゃあ、仕方ないってことになるんじゃないか？」

逐電できる立場ではありません、と鶴松が首を振った。

「町奉行ですよ？ 突然姿を消したら、何があつたのかということになります。厳しく詮議せんぎされれば、五人の目明かしの誰かが鳥居の

居場所を吐くでしょう。死んだことにするというのも無理な筋です。家督相続や、その後のこともあります。百万両を抱えたまま、死ぬまで外に出ないというわけにもいかないでしょう。それでは何のための百万両かわかりません」

鳥居は旗本で、それなりの人数の家来がいる、と團十郎は顔を上げた。

「そいつらを使って、百万両を奉行所から持ち出すってのはどうだ？」

あり得ません、と鶴松が強く畳を叩いた。

「わたしは鳥居のことを徹底的に調べました。養父の遺した書き付けもありましたから、あの男のことはわかっているつもりです。鳥居には忠義心の意味がわかりません。そういう男なのです。だから、家来のことを信じることはできません」

哀れだね、とお葉がつぶやいた、そう思います、と鶴松がうなずいた。

「猜疑心さいぎしんが人の形を取っているようなもので、誰のことも信じられないのです。目明かしたちについても、使い勝手がいいから手足のように使っていますが、心の底ではあの連中を軽侮しています。家族であろうと家来だろうと目明かしだろうと、誰かに百万両を託すことなど考えられません」

じゃあ、奴はどうするつもりなんだ、と團十郎は懐から煙管を取り出した。

「このままじゃ、百万両を客たちに返すしかなくなる。留札が当たるなんて考えられねえし、鳥居も賭け手に回ると言っていたが、妖怪だって留札の番号までは決められねえだろう。つまり、奴は百万両を手放すしかねえんだ」

当てるつもりなのです、と鶴松が静かに言った。

「誰からも文句の出ない形で百万両を手にするには、それしかありません。鳥居が留札を当てたとすれば、取り決めがある以上、客たちはそれに従うしかないんです。不満があっても、当たり札を持っている鳥居には何も言えないでしょう」

馬鹿らしい、と團十郎は低い天井に向かって煙を吹き上げた。

「六万枚の富札のうち、留札は一枚だけなんだぞ？ 十枚に一枚じゃねえんだ。それならまぐれ当たりもあるだろうが、六万枚じゃ話にならねえ。イカサマをやるつもりだとしても——」

鳥居はそのつもりなのです、と鶴松が微笑んだ。

「イカサマを使って、留札を当てる。それしか考えていないでしょう」

「どんなイカサマだ？」

まだ何とも言えませんが、と鶴松が笑みを濃くした。お茶を替えよ

うかね、とお葉が土間に降りて行った。

（じゅく）